Hokuen

北縁

善光寺大本願

御忌（ぎょき）・永代祠堂法要（えいたいしどうほうよう）のご案内

6月21日（日）スケジュール

◉午前10時～　**合葬墓前にて法要**
（納骨されている全精霊位様をご回向します）

◉午前11時～　**講演**（右ページ参照）

……　昼食休憩（お参りの皆様に昼食を用意しています）……

◉午後1時～　**本堂にて御忌・永代祠堂法要**

「御忌」とは念仏の元祖・法然上人の忌日法要のことです。大永4年（1524）に後柏原天皇が下された「大永の御忌鳳詔」で、“毎年正月、京畿の門葉を集め一七昼夜にわたって御忌をつとめ、はるかに教えの源をたずねよ”によります。

法然上人のご生涯は、み仏の限りない慈悲の光の中に生かされ、限りない生命の歓びをかみしめるために只“南無阿弥陀仏”をとなえよと私達にお勧め下さったことにつき、そのみ教えは今も私達の中に輝いています。

当山では、6月21日、以下の寺院様ご参列のもと、御忌法要を執り行います。

- 法性寺（石狩市）
- 阿弥陀寺（岩見沢市）
- 天徳寺（江別市）
- 菩提寺（札幌市北区）
- 龍雲寺（札幌市北区）
- 大松寺（札幌市南区）
- 玄松寺（札幌市中央区）
- 長専寺（札幌市豊平区）
- 善道寺（札幌市豊平区）
- 開運寺（札幌市北区）
- 観音寺（札幌市中央区）

また、御忌法要と合わせて、永代祠堂の精霊1365霊位（個々の霊位に関しましては別紙にてご案内しております）をご回向させていただいております。

是非、ご家族お揃いでお参りいただき念仏をとなえて法然上人のみ教えの遙かに源をたずね、ご先祖様に思いを馳せていただきたく存じます。

尚、新善光寺では随時、永代祠堂を受け付けております。

〈進呈〉浄土宗らしさを盛り込み「つながり」をふたたび強く結びつけることを目的とした一般のエンディングノートとは一線を画した「縁（えにし）の手帖」をお参りの方にお渡しします。

本堂での法要

合葬墓前での法要

講演

時空を超える散歩道・鴨々川漫ろ歩き

石川　圭子 氏
（古民家鑑定士・「ギャラリー鴨々堂」店主）

知っていますか？　中島公園からススキノ南部を横断し豊平川と創成川をつなぐ、長さわずか2.5kmの鴨々川。

この鴨々川周辺にお寺が多いのはなぜか？　いわずとしれた繁華街ススキノであり古い建物の多い場所でもある、この地域。

昨年新善光寺でも開催された鴨々川と共にススキノの歴史をたどる新イベント「鴨々川ノスタルジア」（今年は10月2～4日に開催予定）を実行委員長として指揮した石川氏に鴨々川周辺の変遷を紐解いていただきます。

タイトル通り、あたかも時空を超えてタイムスリップし、鴨々川を一緒に歩いた感覚になること間違いなしです。

〈鴨々堂について〉

札幌ススキノにほど近い鴨々川のほとりに木造2階建てのギャラリーがある。大正末期から昭和初期に建てられた古民家で店主の石川さんが解体される他の古民家で出た廃材も利用し自ら再生したものだ。

2013年11月にオープンし様々な展示をしたり、イベントに使ったりしている。

鴨々川界隈は河畔の柳や寺の樹木、中島公園の緑のせいか同じススキノでも空気がどこか違う。川のほとりに立つ古民家ギャラリーは、心豊かな小さな旅への入口だ。

札幌市南7条西2丁目2（西向き）　TEL：011-596-7929
ホームページ：http://kamokamo-do.com/
地下鉄南北線：中島公園駅から徒歩2分　　地下鉄東豊線：豊水すすきの駅から徒歩3分

工事経過報告

大規模改修工事について

現在、お寺では大規模改修工事を行っています。本堂をはじめ境内建物の大部分に外部足場が掛けられ、また駐車スペースには現場事務所が設置されているため、法事等で来寺されるお檀家様にはご迷惑をおかけしています。

新善光寺の本堂は建立して約 50 年。一番新しい建物である新書院も建設されて約 30 年が経過しております。経年による表面塗装の劣化や金物等の腐食も遠目ではなかなか分かりませんが、かなり進んだ状態でした。その為、昨年度より調査計画し、4 月 1 日から 7 月 20 日までの工期をもって改修工事を行っています。本堂をはじめ、外塀、新書院、和順殿、納骨堂の外壁補修塗装を中心に大規模にまた本堂の飾り金具も取り外して修復も行っています。

現時点では、ひびなどの補修や塗装下地などの工程が終了し、徐々に新しい塗装を施し仕上がってきている状況です。従来、外の塀の色がグレーでしたが、これがそのままの色で塗り直すのではなく新しい色に変わる予定で、歩道や道路から見るお寺の風景も変わるのではないかと思っております。

お盆には一新した伽藍を皆様にご覧いただけると思います。

修復以前の本堂飾り金具

飾り金具を外した状態です

寺務所への入り口です

境内駐車場からみた本堂

道路から見たお寺

外から本堂へあがる階段です

実際に足場をのぼってみました

【新善光寺物語⑩】

火事で焼けてしまった本堂再建に懸ける～番外編

今回はちょうど本堂並びに伽藍の改修工事期間ですので連載していた本堂再建（20～22、27号）の番外編として書きたいと思います。

新善光寺の本堂は「工事経過報告」のとおり建築から約50年経過しています。昭和31年9月に本堂再建発願大法要をおこない、先代住職太田隆賢を中心に檀信徒一同が結集して建てようと誓い合い、昭和39年6月に本堂が完成しました。設計は寺院建築の権威といわれた早稲田大学の田辺泰教授に依頼し、再三にわたって現地視察を行い、北海道の風土に合った建造物にしようと懸命に取り組んでくださいました。また建築は松村組に依頼しました。本堂を建てる前にはご本尊が安置されるだろう場所に阿弥陀経を何字かずつ書いた小石を敷きつめました。おそらく本堂完成の前年に行われた上棟式の写真が残っておりましたので掲載いたします。50年も前だとお寺の周りには高い建物が無いのがわかります。

本堂は、西方極楽浄土を現すものです。中央にご本尊が安置されています。このご本尊は江戸時代中期のものと推測されていますが、どういう由来で新善光寺にきたのかは不明です。また、このご本尊は、昭和21年の札幌大火の時に危うく消失するところでしたが、お寺にいた誰かが、本堂から持ち出して難を逃れました。

ご本尊は阿弥陀如来坐像で長野善光寺と同様に、後ろの厨子に秘仏として一光三尊像が安置されています。秘仏ということで見ることができませんが、「月影の間」という法要をおこなう部屋の中央にあるのがこれを模した一光三尊像です。（ご覧になりたい方はお申し付けください）。

本堂

本堂上棟式の入口

先代住職

上棟式の挨拶をしている杉野目晴貞様（左：松尾師・太田顯隆師）

昭和38年頃の風景

お経を書いた小石を埋めています

報告 長野善光寺ご開帳団体参拝と信州・甲州を巡る旅

平成 27 年 4 月 21 日から 23 日まで計 52 名で団体参拝旅行に行ってまいりした。
今回はその報告をしたいと思います。

1日目　新千歳空港 → 新潟空港 → 彌彦神社 → 信州善光寺宿坊

新潟空港へは小型のプロレラ機（全 74 席）でのフライトで、思ったより揺れも少なく無事に着きました。到着後はバス 2 台で彌彦神社へ向かいます。参拝後は今回の旅行のメインである善光寺へ向かいます。宿坊で精進料理の美味しい夕食をいただき、明日に備えて早めに就寝です。

2日目　善光寺参拝 → 大王わさび農場 → 松本城 → 旅館「ぬのはん」

今回のクライマックスである御開帳参拝、朝 4 時起床です。寒さ厳しい中、本堂へと向かいます。本堂の中では良いポジションが取れました、少し遅かったらかなり後ろだったと思います。
お朝事（朝のお参り）で前立（まえだち）本尊の幕が上がり、小さいいながらも歓声があがります。回向柱に触れたり、お数珠頂戴・戒壇巡り・ご印文頂戴など各種イベントを順調に通ります。最後にお土産を買い、安曇野へ向かいます。
大王わさび農場、そして国宝の松本城へと行きました。松本城は階段が急な為、途中で無理せず登らない方もおられました。そして、諏訪の旅館「ぬのはん」へと向かいます。
お風呂にゆったり浸かり、宴会スタートです。

3日目　甲斐善光寺→ワイナリー→昇仙峡→羽田空港→新千歳空港

甲府にある善光寺へ向かいます。こちらも御開帳をしており、ご住職様自らのお話し、説明がありました。ワイナリーでワイン作りを見学し、昇仙峡に行き、富士山を眺めました。そして羽田空港へと向かい、夜に新千歳空港へと帰ってきました。

信州善光寺

松本城（バス1号車）

松本城（バス2号車）

甲斐善光寺

彌彦神社

善光寺大本願

夜の善光寺

大王わさび農場

説明を聞いています

昇仙峡、よく見れば富士山が

〈お知らせ〉

・次回参加型イベント …… 10 月中におこないます。

今回の旅行は残念ながら行けなかった方もおられたと思います。そこで、毎年 10 月に新善光寺の婦人会で行っていました「秋のレクリエーション」（日帰りで札幌近郊のお寺を参拝します）をどなたでも参加できるようにしたいと思います。詳細は次回の寺報にてお知らせします。ふるってのご参加を期待しております。

自分らしく　あなたらしく
～様々なつながりの中で～

近年、どのように死を迎えるか、もし自分が亡くなったらどのようなお葬式をしてほしいか、どこのお墓・納骨堂に入りたいか。そのようなことを元気なうちから考え、終活しようという機運が高まっております。終活関連の雑誌や書籍も書店に多く列んでいたり、関連のセミナーも人気を博しているようです。
葬儀会場も今では各地区ごとに民間の斎場がありまして、お寺でお葬式をされる方も少なくなってきました。そこで、今回は実際にお寺で従来とは違うスタイルでお葬式をされた方のお話しや写真などを紹介しながら、お葬式について皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

～お寺でお葬式～

まず、7年前に新善光寺の蓮華の間でされた故・亀松二様のご葬儀を紹介します。
故人は漢詩・詩吟・書道をされており、雅号ももたれていました。祭壇にはその作品が掲げられていまして、棺は中央に安置されてその周りにお花、そして椅子が置かれお参りの方々が囲むようなスタイルとなっております。

書を飾っています

周りを囲むような椅子の配置

棺の周りにはお花が

「思うようにして良いですよとご住職様におっしゃっていただきました。お花をしている親戚もおりましたし、周りを沢山のお花で囲んで、そして私達も周りから囲むような配置にさせていただきました。良いお見送りができたと思っております、本当に感謝しています、亡き父も必ず喜んでいるはずです。」と娘様の中島久美子様はおっしゃっております。

次に昨年、宝珠の間（南５条側）でされた故・中田敦子様のご葬儀を紹介します。
故人はお花の仕事をされていて、それが祭壇にもあらわれており、非常にきれいで華やかです。

ご遺影の周りにもお花が

華やかな祭壇です

告別式のようすです

「母は、生前に菊は入れないでほしい・お葬式はお寺でと言っておりました。お花のことを葬儀屋さんに伝えたところ、このような祭壇はいかがでしょうかと言われました。
葬儀時は本当に慌ただしく、バタバタと色々決めていきました。
祭壇には母の作品も置かせていただきました。参列くださった皆様が通夜振る舞いの後に一様に祭壇を撮っていましたね。
お寺でお葬式というと周りからはめずらしいねと言われましたが、非常に丁寧な印象を受けました。私達夫婦もお寺でと考えております。」と息子様の中田良思様はおっしゃっております。

２ページでも掲載しましたが、６月21日の法要にお参りの皆様には「縁の手帖」をお渡しいたします。こちらは「つながりの中にある生と死」をキーワードにして、希薄化する寺院と檀信徒のつながりをふたたび強く結びつけることを目的に発行されました。個人の希望を重視する傾向の強い一般のエンディングノートとは一線を画すほか、“浄土宗らしさ”が随所に盛り込まれています。
お参りに来られない方でご希望があれば郵送いたしますので、綴じ込みのアンケート用紙に「縁の手帖」郵送希望と明記し、お名前ご住所を記入して送ってください。

我が身をみつめればこそ

～主著『選択集』を「壁の底に埋めてください」という真意～

九条兼実公の邸宅（訪れた法然上人を待ちきれず迎える兼実公）

66歳の時に、著した書物というとどんなイメージを持たれるでしょうか。まさに、集大成、長年の努力・活動の賜といった感じではないでしょうか。法然上人（1133～1212）は、建久9年（1198）に『選択本願念仏集』（『選択集』）という論書を著されました。9歳の時父の臨終に遇い、15歳の時比叡山にて出家し、43歳の時誰もが救われる道・お念仏の道を発見した法然上人が、66歳の時書かれたお書物が、『選択集』です。そのような著作であれば、後生に末永く伝え遺すべきと考えがちですが、その『選択集』の最後には「どうか一度この書をお読みになったならば、壁の底に埋めて、人の目にふれるところに遺さないでください」と締めくくられています。法然上人が、悲しみの末にたどり着いた一筋の光とも言うべきお念仏の道が余すところなく説き示されたこの『選択集』を「壁の底に埋めてください」という衝撃的な言葉は、何を意味するのでしょうか。今回は、この『選択集』の結びの言葉にスポットをあてて、浄土宗の教えの根幹に触れたいと思います。

まず、『選択集』が執筆される経緯から探ってみましょう。法然上人65歳の頃、体調を崩されました。日頃より法然上人に教えを拝受していた九条兼実公（1149～1207）が大変心配し、上人が回復した時に、今までいただいたお念仏の教えの肝要を今一度書物にしてくださるように懇願しました。『選択集』の依頼主である兼実公は、摂政・関白など要職を勤めました。また、藤原家の長として栄華を極めつつも、政変による失脚や息子の死など、公私ともに憂き目も多かったことでしょう。その兼実公がお念仏の教えに癒やされていた頃、法然上人はまた病により自らの命の儚さを体感されていたのではないでしょうか。そのような中、『選択集』は誕生します。

さて、16章段からなる『選択集』の内容は、一見するとお念仏一辺倒で排他的な教えだと誤解をしかねません。この誤解は、「もがき苦しむ私法然にとって」という視点に立てば、たちどころに消えます。法然上人が『選択集』の中で説くお念仏の教えは、他と比較してナンバーワンの教えではなく、私にとってオンリーワンの教えなのです。「日頃説く　教えはすべて　今日の日の　我が身のためと　思いしらるる」これは、平成17年に59歳で往生された浄土宗の僧侶である羽田恵三師の詠まれたお歌です。羽田師は、がんを患い余命いくばくもない中でもお念仏の教えを人々に説き示しました。その時の心情を、素直に詠まれたお歌だと感じます。このお歌の「我が身のため」という心こそ、『選択集』を拝するオンリーワンの視点なのです。

しかしながら、法然上人は『選択集』を排他的な教えだと誤解する視点を懸念して、「壁の底に埋めてください」という言葉でこの書の結語としたのではないでしょうか。誤解による争いを避ける配慮だったのかもしれません。争いの種とは、案外互いの理解不足、誤解から生じるものです。私たちの身近な人間関係もそうですが、戦後70年の今年、『選択集』の結びの言葉が深く胸に染みます。

『選択集』の執筆風景（弟子とともにお念仏の要義をまとめる）

〈文：立花　俊輔〉

ズッコケ尼さんの仏教こぼれ話⑩

〈光栄なる祖山（そざん）布教を終えて……〉

駒木根（こまきね）　琴生（きんしょう）

※祖山～各宗派の開祖が開いた寺院。ここでは知恩院をさす。

今年の櫻の開花は記録的な早さ、皆さんはお花見を楽しみましたか？　私は開花スタートと報じられた3月21日、熊本に立っていた。熊本県菊池市にある知足寺のご住職様との良縁にて春彼岸の法話の為で、熱心な檀信徒様達に迎えられた。それから櫻前線は北へと走り続けてゴールの根室に着いたのは5月5日だった。国の花になっている櫻への愛でる国民の心は強く、様々な思いの一人一人に寄り添い、励まし感動を与えた一ヶ月半だったに違いない。また、夜ざくらの美しさも格別である。ハラハラと散る様に人の世の無常が重なる。

散ったお花の魂は、み仏さまの花園に、一つ残らず生まれるの、だってお花は優しくて、お天道さまが呼ぶ時に、ぱっと開いて微笑んで、風がおいでと呼ぶときに、やはり素直に連いてゆき…。　（金子みすゞ「花の魂」）

私の長男は櫻の散り終わった26日に自ら西方浄土へと旅立って逝った。今年、三十七回忌が巡ってくる。逆らわずに母は出家し息子を弔う道に入った。更に布教の学びに進み総・大本山布教師にさせて頂けた。

今月1日より5日間、総本山知恩院で輪番布教を与えられた。6時の朝の法話から初まり、10時半の日中法話と、1日2席だった。ゴールデンウィークで且つ晴天の所為もあり、大変な聴衆者だった。法話後の供養法要の為に全国から集って来る。その皆様にしっかりお念仏お唱えできるように伝えなければならない重責を抱きつつ高座に登る。膨大なお釈迦様のみ教えの中より「これしかない」と法然上人が選ばれた専修念仏である。阿弥陀仏の本願他力に誓われている故に最も勝れている、よって、凡夫の私達は只お念仏お唱えすればお救い頂ける。これこそ、阿弥陀仏の他力の妙味である。

今回、中学3年と小学6年の孫とお嫁さんを京都に招いた。孫からすれば叔父に当たる私の長男の足跡を語る“ばあば”の姿を見てもらいたかった。わずか13歳の人生だったが、確かに生きていたのだ、という現実を受け止めてほしいと望んだ。又、札幌より新善光寺のお檀家様もいた。ご主人様の回向の為で、法話も聞いてくださった。5日の最終日、御堂は溢れんばかりの人前での日中法話を終えて、ほっとして歩き出すと、後ろから声をかけられた。昨年、20歳のお孫さんを事故で亡くされた祖父母だった。「救われるにはお念仏だけですよね。」と涙しつつ心を聞かせてくれた。布教師としての名利の瞬間である。控え室横のツツジが満開で迎えてくれた、光栄なる期間だった。

お嫁さんと孫と

“朝な夕な唱えよろこぶ弥陀の名は、おのが尽きせぬ命なりけり”

シリーズ 仏事のおはなし

お勤めのはなし ❼

今回よりお勤めの中で大切なお釈迦様のお言葉である「経典」の部分のお話をしていきましょう。前回もお話した様に次第の「誦経」部分では、「浄土三部経（無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経）」の中より一部を抜粋し読みます。浄土宗信徒用の勤行本で誦経の部分に「四誓偈」というお経が記載されていることがほとんどなので、この四誓偈についてお話をしていきましょう。

・無量寿経

「四誓偈」は「仏説無量寿経」という経典の一部です。無量寿経は、「巻上・巻下」の二巻からなっており、その内の「巻上」の一部です。四誓偈の中身をひも解く前に、この「無量寿経」という経典について触れておきたいと思います。

無量寿経はお釈迦様が阿難尊者へ法を説いています。阿弥陀さまが長きにわたる修行の末、覚りを開き仏となられたこと。阿弥陀さまが建立した「極楽世界」というお浄土の素晴らしさや往生の方法、阿弥陀如来の功徳などを説かれています。

私たち浄土宗宗徒の「仏さま」は「阿弥陀如来」様です。お釈迦様が人間から覚りを得て仏陀（＝仏）になられたように、阿弥陀さまも初めから「仏（＝如来）」であったわけではなく、修行を経て仏様と成られています。この修行時代には「菩薩」と呼ばれ、仏になるため様々な誓いをたて、その誓いを成就することで「仏（如来）」となられています。阿弥陀さまは修行時代「法蔵菩薩」という菩薩様でした。無量寿経では、この法蔵菩薩が、「世自在王如来」という仏様の御前で「すべての人々を救いたい」という思いを示し、仏と成るための48項目の意思を具体的に示しました。経典の中には「私が仏となったならば……」という誓いの文説が48項目つづられています。この誓いの事を「誓願」と呼びます。誓願とは「自身が覚りの位に到り、衆生を救済しようとする願いであり、誓い」という事です。そして法蔵菩薩の誓願が48あることから「四十八願」と呼んでいます。特に四十八願の中の「第十八願」は「念仏往生の願」といい、浄土宗信仰の中で非常に大切な要項であるため「王本願（特に大切な願）」と呼ばれています。（図1）

せつがとくぶつ　じっぽうしゅじょう　ししんしんぎょう　よくしょうがこく　ないしじゅうねん
設我得佛　十方衆生　至心信樂　欲生我國　乃至十念
にゃくふしょうしゃ　ふしゅしょうがく　ゆいじょごぎゃくひぼうしょうぼう
若不生者　不取正覺　唯除五逆誹謗正法

図1

法蔵菩薩はこの四十八願を成就し、はれて「阿弥陀如来」となられました。

・四誓偈①

さて、この四誓偈では、阿弥陀如来になる前の「法蔵菩薩」が、先の四十八の願を「世自在王如来」の御前で誓った後、改めてその決意を示し（誓い）、世自在王如来の功徳を讃えて自らもそうありたいとしています。「四誓偈」の名の通り、「四つの誓い」が経典の中に説かれています。

一つ目の誓いは「世自在王如来の前で誓った四十八願について、改めて決意表明をし、そのすべての願の成就」を誓っています。（図 2）

がごんちょうせいがん　ひっしむじょうどう　しがんふまんぞく　せいふじょうしょうがく
我建超世願　必至無上道　斯願不満足　誓不成正覚

図 2

二つ目は、「未来永劫に渡り、衆生をあらゆる苦しみから救う」という誓いです。「衆生」は現代に生きる私たちの事も含んでいます。（図 3）

がおむりょうこう　ふいだいせしゅ　ふさいしょうびんぐ　せいふじょうしょうがく
我於無量劫　不為大施主　普済諸貧苦　誓不成正覚

図 3

三つ目は、「お念仏する皆が平等に、必ず救われるお浄土を建立してとしても、その浄土や阿弥陀仏という名が知られずにお念仏する者がいなければ意味がない。よってその名（阿弥陀仏）をすべからく行き渡らせる」という誓いです。（図 4）

がしじょうぶつどう　みょうしょうちょうじっぽう　くきょうみしょうもん　せいふじょうしょうがく
我至成仏道　名声超十方　究竟靡不聞　誓不成正覚

図 4

四つ目の誓いは、経典の中で「最勝尊（さいしょうそん）」と称している眼前の世自在王如来と等しいものでありたいという願いであり誓いです。（図 5）

がんがくえりき　とうしさいしょうそん
願我功慧力　等此最勝尊

図 5

次回より本文とその書き下し、意訳などのお話をしていきたいと思います。

— お檀家タウンページ ～ともいき訪問⑥ —

南陽堂書店

今回は札幌で一番古い古書店に行って、実際に本棚を見せて頂きお話しを伺ってきました。

外観です

店名「南陽堂書店」の由来は初代店主・高木庄蔵さんが南陽に憧れてつけたということです。現店主の高木秀了（ひでのり）さんは３代目になり、祖父・庄蔵さん、父・陽一さんからと続いています。

昭和２年に古本を持って売り歩く行商としてスタートされ、昭和５年に今よりも札幌駅に近い北７条西５丁目にて店舗を始められ、翌年に現在の北８条に線路工事の為、移転され現在まで続いておられ、今年で 85 年になります。13 年前に５階建てのビルにされ、１階・２階が店舗となっています。また、「弘南堂書店」（北 12 条西４丁目）さんは、店主の父・陽一さんの弟である庄治さんが始められています。

札幌には古書籍商組合に加盟している古書店は 40 店ありますが、店舗型の店は少なく、最近は店舗を持たず、ネット販売のみというお店も増えてきたみたいです。

店舗は、１階は北方関係や学術書全般など、２階は昆虫を主に、山岳、動植物などの自然科学書が棚に列んでいます。そのほかにも３階４階にも本はぎっしり置かれているとのことです。北海道昆虫同好会の事務局もされていて、昆虫関係の書籍は非常に豊富で全国の昆虫同好会の会誌まで置かれています。全国各地からも段ボールで送られてきており、取材時は神奈川県からも届いておりました。

左:南陽堂店主の高木秀了さん

店主の秀了さんは昆虫採取のシーズンになると毎週のように行かれており、取材時の前の日曜日には足寄→留辺蘂→深川などとおよそ 700km かけてされていたとのことです。昆虫採取には体力も必要で、高校・大学ではラグビーをされており、現在はジムで体を鍛えているそうです。

雄大な北大のすぐ近くにある古書店「南陽堂書店」さんに是非足を運んでみてください。

本がぎっしりです

１階には郷土史があります

２階には全国の昆虫同好会の会報も

南陽堂書店
〒 060-0808　札幌市北区北８条西５丁目１番地
TEL：011-716-7537　FAX：011-716-5562
HP：http://www.nanyodoshoten.com
Email：nanyodo@rio.odn.ne.jp

職員を紹介します

堀内（ほりうち）　和紀（かずき）

昭和 47 年 4 月 22 日　札幌市生まれ

皆様いつも「北縁」をお読みいただき誠にありがとうございます。この寺報「北縁」では、「北縁何でも Q&A」、「仏事のおはなし」などのシリーズを担当しております堀内と申します。普段は仏教のお話を書いていますが今回は職員紹介という事ですので、少し自分の事を書かせていただきます。

左上より 2 番目 平成 13 年に撮影

私は平成 11 年に、新善光寺現太田眞琴住職の 4 番目の弟子として得度（とくど）しました。そして、平成 13 年冬に大本山増上寺（ぞうじょうじ）にて伝宗伝戒道場（でんしゅうでんかいどうじょうじょうまん）を成満（修業を満了する事）し、浄土宗の僧階（そうかい）を頂きました（お坊さんになりました）。お坊さんになったきっかけは、当時私の祖父が豊平にある善道寺（ぜんどうじ）という寺の住職をしていまして、その寺の後継として入るというご縁を頂いた事です。実は工業大学を卒業しており、大学卒業後は数年間、某ゼネコンで施工管理（せこうかんり）（簡単に言うと建築現場の現場監督）の仕事に就いていました。その頃は、まさか自分が「お坊さんとして檀信徒の方と様々なご縁を頂く」ことになるなどとは全く想像していませんでした。

僧階を得た翌年、平成 14 年より善道寺の副住職に就任し、平成 20 年には祖父であった今井隆道（りゅうどう）（祖父も新善光寺にお世話になっておりましたので、ご存知の方もいるかと思います）より第 4 世の法燈（ほうとう）を継承しました。自坊の法務と兼ねて、新善光寺の法務に従事するという現在に至ります。

豊平区にある自坊の善道寺

得度入山してからの 3 年は師僧のお付きで総代様やお檀家の皆様のところへのお参りにご一緒させていただきましたし、僧階を取得してから現自坊の住職になるまでは、日常法務で月参りや法事などにもお勤めさせていただきましたので、私の事を覚えている方もいらっしゃると思います。

松尾師、石山師と

平成 20 年から現在までの間は、新善光寺において月参りや法事などの法務は行わず、定例法要や葬儀式での出僧の他、法要での司会やこの寺報での原稿を担当するといった、あまり皆様と関わりのない部分での仕事に従事させていただいています。なかなかお話しする機会もない私ですが、定例法要などでお気軽にお声掛けしていただきましたら幸いです。

《宮の沢別院から》

どんりゅう上人伝④「どんりゅうさまの念仏会～どんりゅう祈願の原点～」

徳川家康公との関係ができた曇竜上人（のちの呑龍）の名声は高くとどろいていきました。そんなある年のことです。春から雨があまり降らず、お寺一帯が干ばつに襲われたのです。村人に頼まれた神社の神主さんや巫女さんが雨乞いの祈りをしましたが、いっこうに雨は降らず日照りの日々が続きました。そこで、村人が曇竜上人に雨乞いを願い出たのでした。

曇竜上人は初め「念仏は祈祷ではありません」と固辞していましたが、困った人々を救うのが僧侶の役目と意を決し、竜神の森に村人を集め、一斉に百万遍を目指して念仏会を開いたのでした。老いも若きも子供も、とにかく村人全員で南無阿弥陀仏を唱えました。朝八時から午後三時まで、それこそ生死をかけた大念仏が始まりました。

念仏の声が７時間も続き、命がけのお念仏を申していると、突然青空がかき曇り大きな黒雲が辺り一面を覆ったのでした。村人はさらに声をふりしぼり、南無阿弥陀仏を声が枯れんばかりに唱え続けました。すると、大雷鳴と共に大粒の雨が滝のように降り注ぎはじめたのです。

おかげで乾ききった田畑はよみがえり、野菜は青々と伸び始めました。村人は、曇竜上人のおかげと崇め、一目会いたいと絶えずお寺に訪れるようになりました。

このような念仏会が様々な悩みのたびに開催され、現在においてもどんりゅうさまを祀る寺院では、「どんりゅうさまのご祈願」として心に思う願いを念仏とともに叶えるべく、今なおどんりゅうさまが深く信仰されているのです。

《納骨堂のご案内》

現在、宮の沢別院の納骨壇には空きがあります。格調高い仏壇型のタイプや、現代的なデザインを施したタイプもあり、多種多様です。どうぞ、お気軽にお尋ねください。

札幌市手稲区西宮の沢５条１丁目 19-35
新善光寺　宮の沢別院

TEL 011-668-5110

慈啓会から

慈啓会特別養護老人ホーム

施設全景

藻岩山登山道の麓に建つ慈啓会特別養護老人ホームは、皆様ご存知の通り、大正14年に新善光寺住職林玄松上人がこの地にて創設した「札幌養老院」がその母体となった施設であり、現在の建物には平成10年（南館）および平成16年（本館）に全面改築を終えております。

四季折々の姿を見せる藻岩の自然に囲まれ、全館個室の本館（ユニット型施設）に80名。2名から4名の相部屋である南館（従来型施設）に70名。計150名の要介護認定を受けたお年寄りの皆様が生活をされております。

特別養護老人ホームは、様々な形態の老人ホームの中でも最も介護を要する方向けの施設であり、ご家庭で生活されるのと同じように安心して暮らしを送れるよう、身の回り全般に渡る介護を提供いたします。

生活上のお世話はもちろんのこと、隣接する慈啓会病院と連携しての健康管理や医療の提供を行うとともに、専門の機能訓練指導員を配置し日常的な生活機能を維持するためのリハビリも提供しております。

また、旬の食材を活かした食事も、ご入居者それぞれの身体状況や病状、嗜好に合わせてきめ細やかな対応をいたします。

施設には在宅部門として、短期入所（ショートステイ）、通所介護（デイサービス）、訪問介護（ホームヘルプサービス）、居宅介護支援、介護予防センター、地域包括支援センターなど、地域を支える様々な事業を行っております。

ここ旭ヶ丘の地において、慈啓会特別養護老人ホームは長く地元の皆様と関わりをもたせていただいており、近隣の高校生や小中学生との交流をはじめ、町内会や地域団体との協力連携も進めております。そして、お話し相手や洗濯物畳み、演奏会、歌や踊りの披露などボランティアの皆様にも数多くご来所いただいております。

また、敷地内に隣接する「木洩れびの家ひととき」は、地域の皆様にも気軽にご利用いただけるように広く開放を行っております。

地域と一体となり、快適な生活をおくることのできる施設。慈啓会特別養護老人ホームをぜひともよろしくお願い申し上げます。見学や入所等のお問い合わせにつきましては、随時対応をさせていただきます。

ボランティア活動

木洩れびの家ひととき

楽しいお花見

屋上から札幌の街を望む

連絡先
慈啓会特別養護老人ホーム　〒064-0941　札幌市中央区旭ヶ丘5丁目6-51
電話(011)561-8281　FAX(011)561-8296　Email info-tok@sapporojikeikai.or.jp
担当：山本・石川

お寺の額縁を紹介します②

3 新善光寺（堀尾貫務　上人筆）

外から本堂の階段を上がると正面に「新善光寺」と書かれた額があります。また、同じ字が玄関を入った正面、寺務所の上にもあります。これは、堀尾貫務上人のご染筆です。貫務上人【文政 11 年（1828）～大正 10 年（1921）】は、清浄華院（京都）や百万遍知恩寺（京都）の御法主をされ、明治 35 年には増上寺（東京）の七十七世になられました。90 歳のご高齢にもかかわらず、北海道にもご巡教くださいました。その頃書かれたと思われるのが、この「新善光寺」の書です。

この書は、長野善光寺の山門の額と同じ書体で書かれてあり、俗に“鳩字”といわれています。「善」の一画目などが、鳩サブレのような鳩の形に見えてきませんか。何匹いるか探してみるのも、一興かもしれません。

4 無量寿（藤井実応　上人筆）

ご法事などを勤める「光明の間」というお部屋があります。そのお部屋の正面、阿弥陀さまの上に「無量寿」と書かれた額があります。これは、藤井実応上人のご染筆です。実応上人【明治 31 年（1898）～平成 4 年（1992）】は、昭和 53 年に増上寺法主に、昭和 57 年には知恩院に登られ八十五世となられました。当寺には、昭和 56 年に五重相伝の際お越しくださり、ご親教を頂戴いたしました。

「無量寿」とは、阿弥陀さまの別名で、量ることのできない無限の時間をもっている仏さまという意味合いです。また、阿弥陀さまのことを無量光ともいいます。これは、量ることのできない無限の空間をもっている仏さまということです。無限の時間と空間をもっていればこそ、私たちの喜怒哀楽すべてを受け止めてくださる仏さまが、阿弥陀さまなのです。

北縁　なんでもＱ＆Ａ

Ｑ：毎朝自宅の仏壇へお参りしています。私は朝１回のお参りですが、夜はしていません。朝だけのお参りということで良いのでしょうか。（白石区のお檀家様）

Ａ：以前この寺報でも紹介しましたが、お仏壇には毎朝お茶かお水を供え、朝一番のご飯を仏飯器（ぶっぱんき）に盛り、お供えするという習慣があります（御霊供膳（おれいくぜん）をお供えできる方はお供えします）。多くの信者さんが毎朝ご自宅のお仏壇にお参りをする（朝一回）というのが一般的です。しかし、浄土宗の宗で定められた日常的なお勤めの在り方は、日に三回（朝、昼、夕）で勤めます（僧侶の修行形態はこの形です）。どちらがよろしいかと言えば、無論後者となるでしょうが、やはり日々の生活の中ではなかなか時間が取れない現状もあろうかと思います。いずれにしても、日々継続して行うということが最も大切なことでありますので、毎朝のお参りにしても、日に数回のお参りにしても皆さまの出来る範中で継続して仏様やご先祖様をご供養していただければと思います。

しろいし幼稚園から

元気に育つ　ほとけの子

毎年恒例の新善光寺参拝ですが、今年は工事中のため、４月27日に宮の沢別院へ年長組の園児が参拝に訪れました。当日は灯りとお花を献じ、そしてお寺の中を巡っていただきました。しろいし幼稚園では仏さまの教えを通じて「心の教育」の原点である“生命尊重の保育”を行い、多くのほとけのこどもを育んでいます。

新善光寺学園　しろいし幼稚園
札幌市白石区平和通１丁目南6-16　TEL　011-861-4426
URL：http://www.ans.co.jp/k/siroisi/　Email：siroisi.-pippara@cyber.ocn.ne.jp

仏教体感

慈母観音供養会（願主：明照婦人会）

7月24日（金）13時より

天然石に自然と浮き出た慈母観音様をご供養する法要です。お参りの方には実際に慈母観音様にお水を向けていただきます。どうぞ、お気軽にお越しください。

〈行事予定〉

8月 1日㈯~15日㈯	お盆経参り （お檀家様のご自宅へ伺いお盆のお経を上げます）
8月16日㈰	盂蘭盆大施餓鬼会法要
9月23日㈬	秋彼岸大施餓鬼会法要
10月 2日㈮~ 4日㈰	第二回　鴨々川ノスタルジア

退職のお知らせ

平成5年から新善光寺に勤務しておりました石川亨信は本年3月もって退職いたしました。

在職中はお檀家の皆様に大変お世話になりました。本人に代わって厚く御礼申し上げます。

編集後記

今号も無事に発行することができました。前号同様20ページということでなかなかのボリュームです。ご協力いただきました皆様まことにありがとうございました。皆様のご意見ご感想が励みになりますので、お読みいただいたら是非アンケートハガキにてご感想をお聞かせください。次回はついに30号、記念号ということで何か特別なことを考えております。

次号発行予定は10月初めです。それまではホームページやブログなどで情報発信していきますので、そちらもご覧ください。

新善光寺　検索

（海）

新善光寺寺報
Hokuen 29
北縁

発行／2015年5月発行
発行責任者／新善光寺住職 太田眞琴

〒064-0806 札幌市中央区南6条西1丁目　［TEL］011-511-0262　［FAX］011-511-4706
［ホームページ］http://s-zenkoj.com　［Eメール］s-zenkoj@crux.ocn.ne.jp